

母の死

帝塚山学院高等学校

桑原悠詩

母が亡くなったのは 8 か月前のことだった。原因は癌。最後の数週間は家で過ごし、その日、学校から帰った私が目にした母の姿を一生忘れることはないだろう。

母がいなくなってからの私の日常は、表面上は淡々と流れている。同じ時間に起き、同じ電車に乗り、学校へ行く。そして、皆と同じく、帰ると温かいご飯が出てくる普通の女子高生に見えるよう、必死になっている。それでも、ふとした瞬間にその喪失感が津波のように押し寄せ、すべてを飲み込むような感覚に襲われる。

母は芯が強く、激しくも献身的な人だった。私が 3 歳の時に離婚してからは一人で働き、この家を建て、私立高校に通わせてくれた。母は間違いなく私を愛していたし、私も心から母を愛していた。しかし、私たちの関係はただの愛だけで説明できるほど単純なものではなかった。大抵の親子がそうであるように。

若いうちから社会に出て、自分の力で学校へ行き、望む仕事についた母は、私をも社会に通用する人間に育てるために必死だった。それは確かに愛情だったと思う。私は学校という小さな社会ですら、うまくやっていけるような子供ではなかったから。全てにおいて考えが足りず、また、考えすぎていて、周囲とうまく接することができなかった。だから、母のしようとしたことは十分理解できる。それでも、その母の愛情は時に過剰で、私たちの関係をより複雑なものにしていた。正直、息苦しかった。逃げ出したいと思ったこともある。しかし、母との暖かい時間が数えきれないほど思い出されるたびに、私は混乱してしまう。

料理をすれば母を思い出すから、家にいる間、台所にはほとんど立たなくなった。母の痕跡が残る写真や小物を見るたび、どうしようもない感情に押しつぶされそうになる。悲しいというより、苦しい。行き場のない怒りに近い時もある。今日も、「娘のためにしておくこと」という母の残した手書きのメモを見て、やっぱり立ち直れないかもしれないと思った。母という人間をそのまま表したような、力強く美しいあの字が好きだった。その字で書かれる私への文章、そのすべてが。でも、もうその文字を書く人はいない。それが耐え難い。

母がいなくなった世界で、私はどう生きればいいのか。その答えを今でも見つけられずにいる。というよりも、私はまだ何からも立ち直っていない。この状況が漫画や映画だったら、それでも前を向いて何かをつかみ、エンディングを迎えるのだろう。しかし、現実は違う。私は母の死により一層ひねくれて、薄暗い人間になってしまった。上手くできないことばかり

りで、部屋で1人、幼い子供のように痲癩を起こすことが増えた。周りを取り囲むすべてが嫌になり、家から一步も出られない日もある。きつともう、私が全く元通りになることはないのだと思う。でも、それを損失と捉えるか成長と捉えるかは私次第だ。

今日、騒がしい教室でいつもと変わらない周囲の声を聞いているとふとどうにか覚悟を決めるしかない、と思った。私にとっては大きな喪失でも、そんなことは世界にとって関係がない。極端に言えば、私が世の中を呪い何かとんでもない行動にでも 出ない限り誰も本当に私に目を向けることはないだろう。私が立ち直ろうが立ち止まろうが誰も待つてはくれないのだから、足を進めるしかない。それが現実だ。しかし、その現実がかえって私を慰める。それしか道がないと知ったことが、唯一私を前へ進ませる支えになる。そんなことに気づきたくはなかったけれど、皮肉にも母の存在がそう教えてくれた。だから、少しずつこの現実の中で生きる方法を探し続けようと思う。